

中学生の幼児ふれ合い体験学習に関する研究

藤原由美子*・猪野郁子**

Yumiko FUJIHARA* and Ikuko Ino**

The Study on Experience Learnings That Junior High School
Students Have Relationships with Infant Children

[キーワード：ふれ合い体験学習・直接体験・間接体験・対幼児感情]

はじめに

近年、青少年による事件が相次いでマスコミで報道されている。2000年には17歳による事件が問題となった。たとえ犯罪とならなくとも、自分の殻に閉じこもってしまったり、家族や周囲との人間関係を上手く保てなかったりと、昨今の青少年に、自己認識の不足や他者理解や他者との関係性の認識が希薄化しつつある状況がうかがわれる。1998年の教育課程審議会答申における中学校校技術・家庭科の改善の基本方針の中には「家庭の在りかたや家族の人間関係、子育ての意義などの内容を一層充実すること」⁽¹⁾が示されている。これらのことを念頭に多くの学校現場では「幼児ふれ合い体験学習」が実施されてきた。新教育課程での時間数削減という状況の中においても、なお「実施したい」とする学校は多く、その効果が期待されているところである⁽²⁾。これまでに「幼児ふれ合い体験学習」については、大路・松村らが乳幼児体験は保育の情意面の学習に効果がある⁽³⁾と、中村らは体験回数が多いほど幼児イメージは向上し⁽⁴⁾、幼児を好きでない生徒も体験後は好きと答えるものが増加する⁽⁵⁾と報告している。しかし、一方で体験による問題点もないわけではない。多くの生徒が乳幼児体験でポジティブな影響を受けている中で、乳幼児と接することで疲れを感じ、ネガティブな感情を持つ生徒がいること⁽⁶⁾である。大路・松村らは、同じ乳幼児体験を行ってもなぜ生徒によって、このように学習効果が違うのかを明らかにするため、「幼児ふれ合い体験学習」中、ビデオカメラで撮影した生徒の行動と幼児との交流経過を分析している。その結果、対児感情（本研究の「対幼児感情」

とほとんど同意）のよい生徒とよくない生徒の行動には違いが見られ、対児感情がよくない生徒は体験中、幼児との関わりが少なく、効果的な学習を行っているとはいえない⁽⁷⁾と述べている。しかし行動がともなわなくても、なんらかの精神的な効果はあるのではないだろうか。

本研究においては、体験前と体験後の幼児に対する意識の変化に注目し、統計学的手法によって分析していくこととする。

また、新教育課程において家庭科の時間が削減されることにより、「幼児ふれ合い体験学習」を学校や地域の諸事情で取り入れることができない場合を想定し、ビデオを用いた間接体験における効果についても同じく検証していくものとする。伊藤は「保育学習におけるフィルム視聴には、生徒の子どもへの興味を高めることができる」⁽⁸⁾と報告しているが、この研究は直接体験の効果とは比較されておらず、「子どもへの興味」についても「あなたは子どもに興味がありますか」という一項目のみを調査したものであったことから、本研究においては、より詳しく調査し、比較、分析していくこととする。

方法

中学生の意識調査

2000年9月（第1回）と10月（第2回）に、鳥取県米子市立後藤ヶ丘中学校3年生（7クラス）を対象に、家庭科の授業時間に質問紙によるアンケート調査を行った。なお、欠席や回答不備の者を除いて232名を有効対象生徒とした。

調査項目は「幼児に対するイメージ」（一言での自由

*米子市立後藤ヶ丘中学校教諭

**島根大学教育学部家政教育研究室

記述)と「幼児に対する意識についての項目」(10項目)である。

なお、第2回目は、保育所訪問による直接体験群(4クラス・有効対象生徒135名)、ビデオ視聴による間接体験群(3クラス・有効対象生徒97名)がそれぞれ体験学習を終えてから1~2週間後、1回目と同様の内容に「体験後の感想」加え、再度調査を行った。なお、保育所訪問による直接体験の内容とビデオ視聴による間接体験の内容については、表1に示す。

授業研究

2001年7月と11月、鳥取県米子市立後藤ヶ丘中学校3年生(6クラス)を対象として、ビデオの内容や視聴のさせ方を検討した間接体験(3クラス・有効対象者89名)、事前指導に工夫を加えた直接体験(3クラス・有効対象者88名)による授業実践を行い、ワークシートの記述内容や「対幼児感情」の変化を中心に授業分析を行った。なお質問紙による事前、事後調査は、2000年度の調査項目と同じ内容で行った。

表1 直接体験と間接体験の内容

保育所訪問による直接体験の内容

生徒が交流する保育園児は1歳から5歳児である。各生徒にはあらかじめ何歳の幼児と交流するかを告げてある。クラスごとに日を替えて、交流する。交流時間は60分とし、関わり方や場所は限定せず、生徒が自由に幼児と関わることができるようにした。

ビデオ視聴による間接体験の内容

ビデオは、鳥取県内の保育所の許可を得て2000年9月に撮影したものである。内容は、運動会の練習、当番活動、給食、話し合い、遊び、昼寝等である。主に5歳児とそのクラス担当の保育士が登場する。生徒には、保育の授業時間の前後に15分間時間をとって、ビデオを視聴させる。

結果と考察

一言記述による幼児イメージの変化

(1) 直接体験前後

保育所訪問による直接体験をした生徒は135名(4クラス)であった。幼児に対して中学生がどのようなイメージを持っているか、体験の前と後に一言での自由記述による答えを求めた。図1は、幼児に対するイメージを肯定的なものとするものと否定的なものに分類し直接体験前と直接体験後と比較したものである。「かわいいけどうるさい」「かわいいけどうとうしい」等、肯定的なものとするものと否定的なものとするものが両方あるものや「小さい」「まるい」「よく動

く」「よく遊ぶ」等体型や行動の特徴をあげているものは、「どちらとも言えない」として分類した。

幼児を肯定的に捉えているものは交流前の56%に対して交流後は79%と約8割を占め、かなり増加している。また否定的に捉えているものは交流前の22%に比べ、交流後ではわずか7%とかなり減少している。「どちらとも言えない」に属する生徒は20%で、交流前とほとんど変化はない。これらのことから、直接体験をすると幼児に対するイメージが肯定的になり、否定的な幼児イメージが少なかった。(図1)

(2) 間接体験前後

ビデオ視聴による間接体験をした生徒は97名(3クラス)であった。

図2は、自由記述による幼児に対するイメージを直接体験と同様の方法で肯定的なものとするものと否定的なものに分類

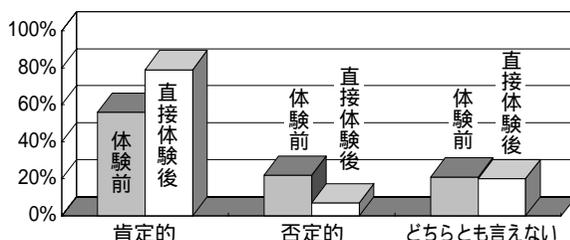


図1 直接体験による中学生の幼児に対するイメージの変化

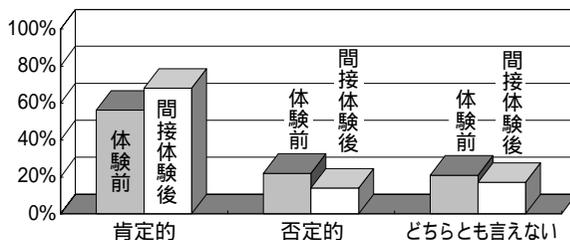


図2 間接体験による中学生の幼児に対するイメージの変化

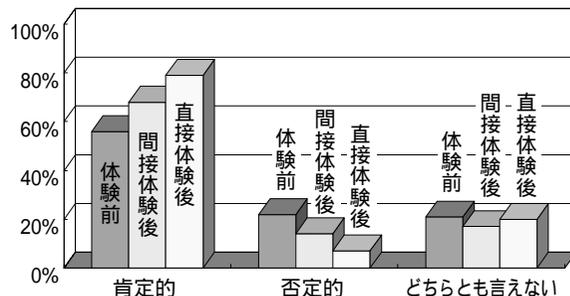


図3 直接体験・間接体験による幼児に対するイメージの変化

したものである。幼児を肯定的に捉えているものは交流前の56%に対して交流後は68%と約7割を占め、かなり増加している。また否定的に捉えているものは14%で、交流前の22%に比べやや減少した。「どちらとも言えない」に属する生徒は17%であった。これらのことから、間接体験は、直接体験同様、体験後には、幼児に対するイメージが肯定的になり、否定的な幼児イメージが少なくなった。

(3) 体験前・直接体験後・間接体験後の比較

図3は、体験前と直接体験後、間接体験後の三者を比較したものである。直接体験、間接体験ともに、体験前に比べ体験後は、幼児に対して肯定的なイメージを持つ割合が増加し、否定的なイメージを持つ割合は減少した。また、直接体験は間接体験に比べ、この傾向が顕著であった。

体験前と体験後の「対幼児感情」の変化

幼児についての意識(10項目)については、SD法で回答をもとめ、それぞれの回答に対し、「とてもそう思う」(5点)～「全くそう思わない」(1点)を与えた。ただし、逆転項目では「とてもそう思う」(1点)～「全くそう思わない」(5点)とした。得点の高いほど幼児に対してポジティブな傾向を持つ。表2は直接体験前後の、表3は間接体験前後の各項目ごとの平均±標準偏差を示したものである。(平均得点は以後「対幼児感情」と呼ぶ)

表2は直接体験を行った135名について、体験前と体験後の「対幼児感情」の平均値を示したものである。どの項目についても直接体験前と直接体験後を比較すると平均値が上がっている。全体の平均は体験前3.39±0.90から、体験後3.82±0.87へと変化した。t検定を行ったところ、すべての項目において有意な差が認められた

次にビデオ視聴による間接体験を行った97名の「対幼児感情」の体験前と後の平均値を示したものである

(表3)。t検定を行ったところ「小さな子供に興味がある」と「小さい子供は、かけがえのない存在である」という項目については、有意な差が認められた。しかし、「小さい子供は面倒だ」については、平均値がビデオ視聴することで逆に下がり、これに有意な差が認められた。全体的な「対幼児感情」についての平均値は、体験前3.22±0.90が体験後3.32±0.89へと少々上がっているものの有意な差は認められなかった。

以上のことより、ビデオ視聴による間接体験については、幼児のイメージを上げたり、興味を持たせたり、「かけがえのない存在」として捉えるようにさせるには効果はあるが、「子供が面倒である」というイメージを持たせてしまう危険性もあるということも考慮しなければならぬということが分かった。

また直接体験は間接体験と比較して、幼児のイメージだけでなく、「対幼児感情」全体が大いに高まるということが明確となった。間接体験の時に、問題となった

表2 直接体験群における「対幼児感情」の変化 n = 135

アンケート内容 *は逆転項目	平均±標準偏差		t検定
	直接体験前	直接体験後	
小さな子供に興味がある	3.33 ± 1.23	3.91 ± 1.09	***
小さい子供は、好きである	3.58 ± 1.23	4.04 ± 1.08	***
*小さい子供は、面倒だ	2.95 ± 1.17	3.24 ± 1.05	***
小さい子供と遊ぶのは楽しいと思う	3.41 ± 1.12	4.12 ± 0.96	***
小さな子供は、かわいいと思う	3.99 ± 1.06	4.23 ± 0.97	***
*小さい子供は、わずらわしい	3.28 ± 1.09	3.53 ± 1.04	**
小さい子供の世話をしあげたい	3.15 ± 1.11	3.45 ± 1.15	***
小さい子供は、かけがえのない存在である	3.45 ± 1.08	4.02 ± 0.97	***
*小さい子供には、あまり関心がない	3.32 ± 1.16	3.74 ± 1.11	***
小さい子どもが泣いていたら声をかけてあげようと思う	3.48 ± 1.04	3.89 ± 1.00	***
平均	3.39 ± 0.90	3.82 ± 0.87	***
	* < 0.05	** < 0.01	*** < 0.001

表3 間接体験群における「対幼児感情」の変化 n = 97

アンケート内容 *は逆転項目	平均±標準偏差		t検定
	間接体験前	間接体験後	
小さな子供に興味がある	3.03 ± 1.27	3.28 ± 1.19	**
小さい子供は、好きである	3.38 ± 1.33	3.44 ± 1.26	
*小さい子供は、面倒だ	2.89 ± 1.10	2.65 ± 1.05	*
小さい子供と遊ぶのは楽しいと思う	3.24 ± 1.28	3.39 ± 1.18	
小さな子供は、かわいいと思う	3.73 ± 1.31	3.87 ± 1.14	
*小さい子供は、わずらわしい	3.19 ± 1.02	3.18 ± 1.05	
小さい子供の世話をしあげたい	2.88 ± 1.19	3.02 ± 1.19	
小さい子供は、かけがえのない存在である	3.37 ± 1.10	3.71 ± 1.00	**
*小さい子供には、あまり関心がない	3.07 ± 1.21	3.02 ± 1.26	
小さい子どもが泣いていたら声をかけてあげようと思う	3.32 ± 1.17	3.51 ± 1.17	
平均	3.22 ± 0.90	3.32 ± 0.89	
	* < 0.05	** < 0.01	*** < 0.001

「子供が面倒である」という項目についても、幼児と直接ふれ合うと全くそのように感じない、逆に面倒でなくなるといった結果であった。

低・中・高群別における「対幼児感情」の変化

体験前の「対幼児感情」の得点により、低・中・高にグループ分けをし、「対幼児感情」の変化についてさらに詳しく分析していくこととする。「平均 + 標準偏差」より得点の高いもの (>4.25) を高群、「平均 - 標準偏差」より得点の低いもの (<2.37) を低群、その中間を中群とした。

表4はその結果である。直接体験群については、どの群においても体験後の「対幼児感情」の得点は上がっており、特に、低群と中群には有意な差が認められた。たとえ低群の生徒の交流が消極的であったとしても「対幼児感情」が高まっていることから、直接体験は低群にも心理的な効果はあったといえる。間接体験群については、

特に低群の生徒の「対幼児感情」の得点が体験後に上がり、有意な差が認められた。ビデオ視聴による体験は、低群の生徒たちに特に効果のあることが明らかとなった。中群も体験後には対幼児感情の得点が上がっている。しかしこれに、有意な差は認められなかった。高群については体験後の「対幼児感情」の得点が逆に低くなり、これに有意な差が認められた。このことから、「対幼児感情」の得点が有意に下がった理由を分析していく必要があると考える。

以上、直接体験・間接体験の共通の結果として、両群に共通していえることは、低群に効果があったということである。このことから、「幼児ふれ合い体験学習」を一部の幼児に対して興味を持っている生徒にのみに履修させるのではなく、幼児に対して関心の薄い生徒も含めて、全生徒に履修させることでより多くの効果が期待できると考える。これらの結果は、今後「幼児ふれ合い体験学習」を進めていく上で大いに参考になりうる事項である。

表4 ふれ合い体験前後における群別「対幼児感情」の変化

		低群	中群	高群
間接 体験	間接体験前	1.68 ± 0.49	3.34 ± 0.52	4.56 ± 0.21
	間接体験後	2.27 ± 0.80 n=18	3.40 ± 0.68 n=62	4.26 ± 0.51 n=15
直接 体験	直接体験前	1.75 ± 0.38	3.24 ± 0.51	4.59 ± 0.25
	直接体験後	2.47 ± 1.09 n=13	3.74 ± 0.65 n=89	4.65 ± 0.28 n=30
		* < 0.05 ** < 0.01 *** < 0.001		

対幼児感情高群についての分析

ここでは、対幼児感情高群における「対幼児感情」の得点が間接体験前と間接体験後に有意に下がった理由について分析し解明していくこととする。表5では対幼児感情高群の間接体験前後の「平均 ± 標準偏差」を示し、t検定を行ったものである。その結果、平均得点はどの項目も下がり、特に「小さい子供は、面倒だ」と「小さい子供にはあまり関心がない」という項目に有意差が認められた。

間接体験後の自由記述による感想を表6に示す。生徒たちは幼児を「かわいい」と思いながら、一方では「しっかりしている」「きちんと」「しんけん」に「自分で」「きまりを守る」と捉えている。これはビデオ内容の当番活動や途中けんかの場面で幼児が話し合っ解決するところ、ところが印象付けられ、ただ「かわいい」だけでない側面を見ることによって、得点が下がったと考えられる。今後、間接体験において「対幼児感情」を高めていくには、ビデオの内容について検討していく必要があると考えられる。

表5 間接体験前後における高群の「対幼児感情」の変化

アンケート内容 *は逆転項目	平均 ± 標準偏差		t検定
	間接体験前	間接体験後	
小さな子供に興味がある	4.66 ± 0.48	4.53 ± 0.74	
小さい子供は、好きである	4.93 ± 0.25	4.73 ± 0.59	
*小さい子供は、面倒だ	4.20 ± 0.41	3.53 ± 0.91	*
小さい子供と遊ぶのは楽しいと思う	4.73 ± 0.45	4.46 ± 0.63	
小さな子供は、かわいいと思う	5.00 ± 0.00	4.73 ± 0.59	
*小さい子供は、わずらわしい	4.33 ± 0.72	4.13 ± 0.83	
小さい子供の世話をしあげたい	4.46 ± 0.51	4.06 ± 0.79	
小さい子供は、かけがえのない存在である	4.20 ± 0.77	4.06 ± 0.79	
*小さい子供には、あまり関心がない	4.60 ± 0.50	3.93 ± 1.16	*
小さい子どもが泣いていたら声をかけてあげようと思う	4.53 ± 0.63	4.40 ± 0.63	
平均	4.56 ± 0.21	4.26 ± 0.28	*
* < 0.05 ** < 0.01 *** < 0.001			

表6 対幼児感情高群の間接体験後自由記述による感想

- ・思っていたよりも一人でなんでもできて、すごいと思う。みんなで協力もできていた。しっかりしていると思う。けんかをするところはやっぱりかーという感じでした。そういうところもかわいい。全体的にきちんとできている。
- ・たくさん仕事をしている。とてもしっかりしている。
- ・自分のことは自分でできていたので驚いた。それにかわいいと思った。
- ・みんな元気がかわいかった。案外しっかりしている。自分にもあんな頃があったのかなあ。
- ・すごくかわいい。おちゃめだ。
- ・かわいかった。
- ・自分のできることはきちんとやっていますすごいと思った。なにをするのも一生懸命で楽しそうにやっていた。何事もしんけん^①にやっていた。自分のことが自分でできるよう学んでいた。小さいときは大切だ。
- ・思っていた以上にしっかりしていた。当番をちゃんとやっている。中3よりある意味ではすごい。
- ・懐かしい。意外にしっかりしていた。とても無邪気で楽しそう。
- ・みんな元気。先生の取り合い見たいなところがかわいい。誉めてもらいたいかすごく分かる。お手伝いとかそんな小さなことが大切なんだなと思った。このころの生活が大切なんだな。
- ・一人一人がしっかりしているんだな。自分のことは自分で決められた当番をきちんとできるとはすごい。何をしても楽しそう。先生の言うことをきちんと聞いている。
- ・とてもよくはしゃいでいたので無邪気だなあと思った。とてもよく動かし、元気がかわいいな。
- ・自分が幼稚園の頃を思い出した。かわいいと思ったけど先生が大変そうだなと思った。水やりで、順番を守ったり、仕切っている子がいたりしてすごいなと思った。面白かった。
- ・わんぱくでみんなかわいかった。外でも楽しそうにみんなで遊んでいると元気がわいてくる気がする。子供を見ていたり、いっしょにいと、自分の子供のころに戻ったような気がする。
- ・元気が良かった。いっしょに遊ぶのが楽しそうだった。4、5歳なのに結構いろいろな決まりを守れたりしてすごいなと思った。自分もあんなのだったのかと思った。とにかく、元気が良かった。

授業実践と結果

以上の結果をもとに、授業設計を行い直接体験、間接体験による授業実践を行った。

(1) 間接体験による授業の概要

1) ビデオの内容

「対幼児感情」や印象面を検討し、保育園での他の生徒と幼児との交流場面と、家庭での幼児と親の会話や遊びの様子を編集したものを付け加えることとする。この

ビデオに登場する親子は、3年の教科の指導に当たっている教師とその子供とし、生徒により親しみを持たせ印象付けたい。

2) ビデオ視聴のさせ方

今回は、「幼児ふれ合い体験学習」とは特に関わりのない内容の「保育」の授業時間の前後に約15分間の時間をとって視聴させたが、ビデオ視聴を中心とした1時間の授業の中で取り扱うこととする。幼児をより印象深く意識させるため、ビデオ視聴後、幼児について生徒同士がお互いに感想を述べ合う場を持つこととする。

またビデオ視聴の際、幼児の遊びに注目させ「いっしょにできる遊びやしてあげたいこと」について考える場を設け、積極的に視聴させる。

3) 間接体験による授業実践

1. 題材名：「ビデオで幼児に出会おう」
2. 授業者：藤原 由美子
3. 目標と展開：資料1に示す。
4. 授業の概要

「ビデオで幼児に出会おう」

資料1の指導案に沿って、2001年7月に3クラスの授

資料1 「ビデオで幼児に出会おう」展開(1時間)

・学習目標...幼児のビデオを見ることにより、幼児に対する印象を高める。

学習活動	学習の流れ	指導上の留意点と評価
1 本時の課題を確認する	はじめ 課題提示 ビデオで幼児に出会おう	アンケートにより、今までの自分の幼児に対するイメージについて確認する。 本時はビデオを通して、幼児に出会うことを告げる。
2 ビデオを視聴する	ビデオを視聴する。 個別指導 幼児とできる遊びを考える。 評価1	同年の先生の子供や保育園での他の生徒の交流の様子を視聴させることで、幼児を身近に感じさせる。 遊びや行動に注目しながら、ビデオを視聴させる。 幼児といっしょにできる遊びやしてあげたいことを考えさせる。 【評価1】 積極的にビデオを視聴し、幼児とできる遊びについて考えることができたか。(観察・ワークシート)
3 幼児についての印象をまとめ、発表し合う。	ビデオの感想をまとめ、発表し合う。 評価2 おわり	ビデオの感想をワークシートにまとめ発表させるとともに、幼児に対する自分の印象の変化についても確認させる。 【評価2】 幼児についての印象を高めることができたか。(発表・ワークシート)

業を実施した。3年担当の教師が、家で2歳の娘と会話したり、遊んだりしている様子を生徒たちは興味を持って視聴した。しかし一方でビデオを積極的に見ようとはしない生徒もいた。他の生徒が保育園児と交流している様子については、どの生徒も積極的に視聴した。特に本年度の交流の様子を視聴した（はじめの2クラスは前年度の生徒の交流の様子、最後に授業を行ったクラスは本年度の他クラスの交流の様子を視聴）クラスの生徒は、共感的に視聴することができた。

ビデオ視聴後「幼児といっしょにできる遊びやしてあげたいことは何か。」という発問に対しては、ほとんど全員が容易に答えることができた。ビデオの感想には、「かわいかった」「遊びたい」「ちゃんは、2歳なのに上手に話すことができるので驚いた」と答える者が多く、発表の中では否定的なものはなかった。

(2) 間接体験による「対幼児感情」における変化

アンケート調査は、授業前と授業後1～2週間以内に前年度と同様の内容で行った。表7は間接体験による授業前後の「対幼児感情」の変化を示したものである。t検定を行ったところ、「対幼児感情」全体の平均値について、前年度は有意な差が見られなかったが、今回の授業においては、授業前 3.45 ± 0.86 が授業後 3.54 ± 0.84 へと上

表7 間接体験による授業前後の「対幼児感情」の変化

アンケート内容 *は逆転項目	平均±標準偏差		t検定
	授業前	授業後	
小さな子供に興味がある	3.40 ± 1.17	3.61 ± 1.07	**
小さい子供は、好きである	3.70 ± 1.23	3.92 ± 1.40	*
*小さい子供は、面倒だ	2.98 ± 1.18	3.02 ± 1.12	
小さい子供と遊ぶのは楽しいと思う	3.47 ± 1.25	3.54 ± 1.18	
小さな子供は、かわいいと思う	4.12 ± 0.96	4.18 ± 0.94	
*小さい子供は、わずらわしい	3.36 ± 1.09	3.34 ± 1.05	
小さい子供の世話をしてあげたい	3.03 ± 1.19	3.17 ± 1.09	
小さい子供は、かけがえのない存在である	3.48 ± 1.03	3.71 ± 1.08	*
*小さい子供には、あまり関心がない	3.49 ± 1.15	3.59 ± 1.13	
小さい子どもが泣いていたら声をかけてあげようと思う	3.56 ± 1.00	3.50 ± 0.98	
平均	3.45 ± 0.86	3.54 ± 0.84	*

* < 0.05 ** < 0.01 *** < 0.001

表8 間接体験の授業前後における群別「対幼児感情」の変化

		低群	中群	高群
間接体験	授業前	2.15 ± 0.39	3.53 ± 0.48	4.64 ± 0.19
	授業後	2.34 ± 0.66	3.63 ± 0.51	4.56 ± 0.25
		n=17	n=57	n=15

* < 0.05 ** < 0.01 *** < 0.001

が有意な差が認められた。項目ごとに見ていくと、「小さな子供に興味がある」「小さい子供は、好きである」「小さい子供は、かけがえのない存在である」について、有意な差が認められた。「小さい子供は、面倒である」という項目については、前年度は平均値が有意に下がるという結果であったが、今回の間接体験の授業においては逆に平均値が上がっている。これらのことから、「対幼児感情」の向上に今回の授業は有効であったといえよう。

授業前の「対幼児感情」の得点による低・中・高群別による変化を表8に示す。前回の間接体験では、低群の得点の向上に有意な差が見られたが、今回の授業後には得点に有意な差が見られなかった。しかし中群の得点は上がり、これに有意な差が見られた。高群については、前回の体験では得点が逆に下がり、これに有意な差が見られたが、今回の授業においては、得点は4.64から4.56に下がったものの、これに有意な差は認められなくなった。前回問題になった高位群における得点の減少が少なくなったことは、今回の授業の成果であると思われる。

(3) 直接体験による授業の概要

1) 事前指導

保育園訪問をより効果的に行うために、ビデオ視聴を事前指導の中で取り扱う。ビデオの内容は、本校の生徒が保育園児と交流しているもの（前年度の交流あるいは本年度の他クラスの交流）と現在のクラスごとの保育園児の様子を取り扱う。また、ビデオ視聴後は具体的な交流のし方や交流時の留意事項について考えさせる。

2) 保育所訪問

「準備、練習したこと」や「心構え」を確認させ、積極的に安全な交流できるようにする。それぞれの生徒が、その場の幼児の様子に合わせて関わることができるよう支援する。

3) 授業実践

1. 題材名：「保育園の子どもたちと交流しよう」

2. 授業者：藤原 由美子

3. 目標と展開：資料2に示す。

4. 授業の概要

2001年7月1クラス、11月2クラス、合計3クラスの実践を資料2の

資料2 「保育園の子どもたちと交流しよう」指導計画と展開(2時間)

- ・指導計画 第1次「保育園の子どもたちと交流しよう」(事前指導)(1時間)
第2次「保育園訪問」(1時間)
第3次「まとめ」(課外)

・学習目標...保育園の園児の様子を知り、どのように交流したらよいかを
考えることができるとともに、交流に対する意欲を高める。(1時間)

学習活動	学習の流れ	指導上の留意点と評価
1 本時の課題を確認する	はじめ 課題提示 保育園の子どもたちと交流しよう ビデオで保育園の様子を知る。	・ 本時は保育園を訪問するための準備の時間であることを確認させ、課題を告げる。
2 幼児との交流方法を考える	幼児とどんな遊びができるか発表し合う。 準備、練習や心構えについて考える。	・ 本校の中学生が幼児と交流している様子と、現在の保育園の様子を撮ったビデオを用いる。 ・ どんな遊びをしているかを記録しながらビデオを視聴させる。 ・ 今回のビデオや幼児の遊びについての学習を参考に、実際にどんな遊びができるのかを考えさせる。その際、年齢、人数、天候も考慮させる。
3 交流時の留意事項について考える。	評価1 交流時の留意事項を考え発表し合う。 評価2	【評価1】 ・ 積極的に交流方法を考えることができたか。(発表・ワークシート) ・ 今回のビデオやこれまでに学習してきた幼児の特徴を思い起こさせ、幼児に合った接し方を考えさせる。
	おわり	【評価2】 ・ 幼児の特徴に合った接し方を考えることができたか。(発表・ワークシート)

・ 学習目標...積極的に幼児と関わり、楽しく交流することができる。
(体験1時間・まとめ課外)

学習活動	学習の流れ	指導上の留意点と評価
1 保育園訪問の課題を確認する	はじめ 保育園での交流について各自の課題を確認する。	・ 前時各自が考えた交流方法や準備、心構え等について確認させるとともに、安全や接する時の注意事項を告げる。
2 幼児と出会う	各クラスに入り、幼児に出会う	・ 挨拶をして、その年齢の幼児に分かりやすい自己紹介をさせる。ただし、1・2才児のクラスは静かに入り、その場の幼児の行動に合わせて交流を開始させる。
2 幼児と交流する	幼児と積極的に交流する	・ 始めは、準備、練習してきた遊びを行うが、その場の幼児の様子を見て自由遊びに入らせる。 ・ 幼児と積極的に関われない生徒については、幼児と関わられるよう支援、声掛けを行う。 ・ 安全に気を付けて交流しているか留意する。
3 幼児と別れる	評価1 片付けをして、幼児と別れる。 保育園訪問を振り返り、感想を書く。	【評価1】 ・ 積極的に幼児と交流することができたか。(観察) ・ 幼児とともに片付け、心をこめて挨拶して別れさせる。
4 まとめ(課外)	評価2 おわり	【評価2】 ・ 保育園訪問を想起し感想を書くことができたか。(ワークシート)

指導案に沿って行った。

第1次「保育園の子どもたちと交流しよう」(事前)

ビデオ視聴は間接体験群の15分間に比べ、5分間とかなり短いものであったが、他の生徒の交流の様子に興味を持って視聴することができた。1歳児から5歳児の現在のクラスの様子も視聴したが、特に1, 2歳のクラスは「小さい」「かわいい」という反応が大きく、4, 5歳児のクラスは「おもしろい」という声が聞かれた。次の時間に交流するという気持ちからか、全員がビデオに集中していた。

ビデオ視聴後、「園児とどんな遊びができるか。」ということについて考えさせたが、どのクラスでも全員の生徒が答えることができていた。その後、「自分はどうなことを具体的に準備、練習したらよいか。または心の準備として、保育園訪問での心構えについて考えてもよい。」と指示し記述させた。短時間では具体的にどのような交流ができるかをイメージできた者は半数程度で、後の者は他の生徒の発表を聞いているうちに徐々にイメージすることができた。

第2次「保育園訪問」(1時間)

4, 5歳児のクラスでは、まず中学生が自己紹介をした。そこで、体操技の披露や絵本の読み聞かせ、歌等、生徒がそれぞれ準備してきたことを活用した。その後、保育士さんのリードでゲームを行った後、自由遊びに入った。3歳児は自己紹介の後、すぐ自由遊びに入った。自由遊びでは、室内で遊ぶか、戸外で遊ぶかは、生徒や幼児の意思に任せた。室内では、あやとり、絵描き、ブロック、戸外では、砂遊び、ボール遊び、泥だんご作り、縄跳びなどの遊びが多かった。

1, 2歳児のクラスではおやつを飲食を手伝ったり、室内での自由遊びを行ったりした。絵本の読み聞かせや人形遊び等各自で準備したものや、ブロックやままごなど各クラスにあるもので遊んだ。

始めは、恥ずかしそうにしている生徒も、時間の経過とともに、幼児と自然にふれ合うことができた。幼児を抱いたり、おぶったりするものも多く、時間終了後には「もっといたい」というような声も聞かれた。

(4) 直接体験による「対幼児感情」における変化

表9は直接体験による授業前後の「対幼児感情」の得点の平均値を示したものである。t検定を行ったところ、前年度に比べ、有意水準の下がっている項目があるものの、体験後はすべての項目において得点が高がり、これに有意な差が認められた。「対幼児感情」全体の平均値については、授業前3.54 ± 0.88が授業後3.80 ± 0.77へと上

表9 直接体験による授業前後の「対幼児感情」に関する変化 n=88

アンケート内容 *は逆転項目	平均±標準偏差		t検定
	授業前	授業後	
小さな子供に興味がある	3.43 ± 1.04	3.75 ± 1.07	***
小さい子供は、好きである	3.69 ± 1.09	3.91 ± 1.08	**
*小さい子供は、面倒だ	3.00 ± 1.13	3.27 ± 1.13	*
小さい子供と遊ぶのは楽しいと思う	3.55 ± 1.13	4.03 ± 0.93	***
小さな子供は、かわいいと思う	4.06 ± 0.94	4.25 ± 0.91	*
*小さい子供は、わずらわしい	3.38 ± 1.19	3.68 ± 1.06	**
小さい子供の世話をしあげたい	3.22 ± 1.13	3.44 ± 1.01	**
小さい子供は、かけがえのない存在である	3.54 ± 0.93	3.87 ± 0.90	***
*小さい子供には、あまり関心がない	3.30 ± 1.16	3.66 ± 1.15	***
小さい子どもが泣いていたら声をかけてあげようと思う	3.71 ± 1.01	3.97 ± 0.98	**
平均	3.54 ± 0.88	3.80 ± 0.77	***

* < 0.05 ** < 0.01 *** < 0.001

表10 直接体験の授業前後における群別「対幼児感情」の変化

		低群	中群	高群
直接 体験	授業前	2.36 ± 0.22	3.31 ± 0.46	4.73 ± 0.20
	授業後	2.76 ± 0.39	3.63 ± 0.59	4.80 ± 0.20
		n=8	n=60	n=20

* < 0.05 ** < 0.01 *** < 0.001

がり有意な差が認められた。これらのことから、「対幼児感情」の向上に今回の授業も前回同様効果的であったといえよう。低・中・高群別による分析を行った結果を表10に示す。低・中・高すべての群において得点が上がリ、特に低群と中群に有意な差が認められた。直接体験は前回同様「対幼児感情」を高める上で効果があることが明確となった。

．おわりに

中学校技術・家庭科において、近年、多くの学校で「幼児ふれ合い体験学習」が実施され、その効果は高く評価されている。本研究においては、「幼児ふれ合い体験学習」の効果や問題点を直接体験・間接体験の二方向から探り、さらに授業研究を行い「幼児ふれ合い体験学習」の効果や在り方について検討した。その結果、次のようなことが明らかとなった。

(1) 直接体験、間接体験ともに、体験前に比べ体験後は、幼児に対して肯定的なイメージを持つ割合が増加し、否定的なイメージを持つ割合は減少した。また、直接体験は間接体験に比べ、この傾向が顕著であった。

(2) 直接体験群においては、体験後「対幼児感情」の得点上がり、これに有意な差が認められた。

(3) 間接体験群においては、体験後「対幼児感情」の得点は上がったものの、これに有意な差は認められなかった。

(4) 直接体験群、間接体験群ともに、対幼児感情低群において得点上がり、これに有意な差が認められた。

(5) 間接体験群高群において、「対幼児感情」の得点有意に下がるという結果が見られた。さらに調査を進めたところ、これは、ビデオの内容が影響しているものと推測された。

(6) 直接体験による授業実践においては、前年度と同様「対幼児感情」の得点上がり、これに有意な差が認められた。

(7) 間接体験による授業において、ビデオの内容や見せ方を検討したところ、「対幼児感情」の得点上がり、これに有意な差が認められた。

以上である。

新教育課程における「幼児の生活と幼児とのふれ合い」は、生徒の興味関心に応じて履修させる内容となっているが、「幼児ふれ合い体験学習が対幼児感情の高くない生徒にも効果があること」という今回の結果を考慮すれば、全員が履修することが望ましいと考えられる。

本研究においては、「幼児ふれ合い体験学習」の効果についての持続性については調査しなかったが、「ふれ合い体験の効果は1～8年経過しても持続し、赤ちゃんや育児に対して好感的立場をとる⁽⁹⁾」「中学生の時期までに幼児とふれ合う機会の多かったものは、将来子ども好きになる傾向が見られ⁽¹⁰⁾、育児に対する自信につながる⁽¹¹⁾」等の報告がある。中学生の時期までに「幼児ふれ合い体験学習」の機会を与えることは、その時ばかりでなく、生徒たちの将来に関わってくることである。このような視点からも「幼児ふれ合い体験学習」の意義は大きい。

現在日本は、少子化傾向にあり、中学生の周りには幼児が少ないからこそ、意図的にこのような学習を仕組んでいくことが必要であろう。たとえ地域や学校の事情で、

「直接的なふれ合い体験」が実施しにくい状況であっても、間接体験のし方を工夫し効果を上げることも考慮しつつ、今後の「幼児ふれ合い体験学習」に期待したい。本研究は「幼児ふれ合い体験学習」の必要性や体験方法についての一考察になり得たであろう。

参考・引用文献

- (1) 教育課程審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）」1998
- (2) 山本典子修士論文「青年の次世代育成力を規定する心理的要因に関する一研究」2001
- (3) 大路雅子・松村京子「雑誌掲載事例に見る中学・高校生の乳幼児体験学習の効果と問題点」日本家庭科教育学会誌 第41巻第1号 55 - 62 1998
- (4) 中村喜美子「幼児への興味・関心を高める補助教材の活用」高部和子編『Assetビジュアル家庭科教育講座』第6巻229 235 1998
- (5) 中村喜美子・田嶋美保・濱島律子「保育学習における中学生の幼児に対するイメージの変化 - ふれあい体験学習を通して - 」愛知大学家政学教室研究紀要 第27号 9 - 19
- (6) 前掲書(3)と同じ。
- (7) 大路雅子・松村京子「高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究（第1報）」日本家庭科教育学会誌 第41巻第4号 31 - 43 1998
- (8) 伊藤葉子「保育観に及ぼす視聴覚教材の方向性の影響」日本家庭科教育学会誌 第30巻 第3号 48 - 53 1987
- (9) 石川清美・田中義人・清水凡生「思春期ふれ合い体験学習の効果とその意義」小児保健研究 第55巻 185 - 186 1996
- (10) 中央教育審議会「新しい時代を育てるために 次世代を育てる心を失う危機（答申）」p.2 1998
- (11) 牧野カツコ「育児における不安について」家庭教育研究所紀要 第2号 1981